

ハクガンの復活

ハクガンは歌川広重や伊藤若冲の作品にも数々描かれているなど、江戸時代まで身近な存在でありました。しかし、明治時代に入ると狩猟などで乱獲されたことにより、ついに絶滅してしまった歴史があります。ハクガンだけでなく、シジュウカラガンやタンチョウ、トキなども同じような経緯をたどり、国内では観察されなくなったのです。

日本雁を保護する会の呉地正行氏は、ロシア、アメリカの研究者と合同で長い年月をかけ、日本から姿を消したハクガンを1000羽を越えるまでに復活させました。



仲間の元にヒラヒラと舞い降りる光景は、感動ものです。

現在大湊村はハクガンの越冬地となり、国内でまとまった数が観察されるのはここだけとされています。

12月上旬、ハクガン見たさに大湊村に向かった。広大な田んぼをあちこち探し求めて、やっとハクガンの群れを発見。その数約500羽。群れにはヒシクイやマガン、シジュウカラガンも混じり最高のロケーションとなった。端から端までじっくりと眺めていると、ハクガンの中に貴重な青ハクガンが見つかった。



翼の両端が黒いのが、見分けのポイント。手前の灰色が幼鳥。



右がハクガン、左は青ハクガンで、首から下は濃い褐色です。

群れのほとんどが頭を下げ餌を探しているが、一瞬だけ頭をもたげた時に見つかったものです。
直ぐそばで、全身が黒っぽい青ハクガンの幼鳥がいます。更に目の周りが黒いアオハクガンも見つかる等、超ラッキーの撮影でした。誰が名付けたのか、パンダアオハクガンと呼ばれているようだ。



青ハクガンの後ろにいるのが幼鳥で、全身が濃い褐色です。



頭だけ白く、目の周りが黒く見えます。これがパンダアオハクガン？